



Title	<書評>上羽陽子著『インド染織の現場 つくり手たちに学ぶ』
Author(s)	山崎, 明子
Citation	デザイン理論. 2015, 66, p. 88-89
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/56340">https://doi.org/10.18910/56340</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

上羽陽子著

『インド染織の現場 つくり手たちに学ぶ』

臨川書店, 2015年, 199ページ

山崎明子／奈良女子大学

本書は、インド西部のカッチ県に居住するラバーリーの人びとの刺繍、編み、織りをめぐるフィールドワークの記録をまとめたものであり、また著者・上羽陽子氏がラバーリーの人びとと暮らし共にものづくりをする中で見出した手仕事の価値を、数年間問うてきた軌跡を共有する一冊である。

手仕事の語りにおいて、「手間」と「価格」はその「もの」の価値を見極める重要な指標となってきた。「手間」とは、単にそのものが出来上るまでの手数（てかず）と時間だけでなく、職人が技術を習得するまでのプロセスも含めて考えても良いだろう。また、ものの商品価値は通常市場原理に委ねられ、美的価値や希少性などが考慮され、それが「価格」に反映すると考えられている。そんな当たり前にも思える手仕事の評価の視点は、ある意味、松宮秀治が「ミュージアムの思想」<sup>1</sup>と呼ぶ西欧帝国主義的な蒐集と展示の欲望を背景とするものの価値体系の反映だと言えるだろう。本書の最初の方で著者は次のように述べている。

「どうして私たちは、ものをみたときに、そのものができあがるまでの時間と値段が気になってしまうのだろうか。」

著者の言葉は、私たちがあたかも「普遍的」だと思い込んでいるものの価値体系に対する根本的な問いとなっている。ものの価値は普遍的ではない——著者はそのことをインドのラバーリー社会におけるフィールドワークから、そのコミュニティの暮らしの中で定位された手仕事を見定める旅の中で明らかにしていく。

本書の概要は以下のとおりである。

著者は、裂織の作品制作に取り組んでいた大学四年生の時、インドのグジャラート州で開催された国際絞り会議へ行き、その土地の多彩な染織品に出会った。そこで「芸術大学」の「染織」の中で芸術性が低いと捉えられがちな刺繍・編物・アップリケなどの手芸と呼ばれる造形物の価値を見直していくことになる。「手芸とはなんなのだろうか」「手芸という概念は世界中にみられるものなのだろうか」という、著者自身の中に生まれた大きな問いは、ラバーリーのものづくりを通して解きほぐされていくことになる。

第一章では、大学院生になった著者が、再びインドへ赴き調査を始める。滞在する家を探し、言葉を覚え、人びとの生活を少しずつ知っていく様子、そして著者がラバーリーの刺繍を習い、刺繍布に囲まれる生活体験が記されている。作ることを学ぶ中で知り得た刺繍の特徴や技法が丁寧に紹介されている点は大変魅力的である。

第二章では、刺繍布の制作技術を習得した著者は、トーランと呼ばれる飾り布を制作することになり、トーランの制作を通じてラバーリーの女性たちから刺繍の意匠や布地の価値などを知っていく。また滞在する家庭の「養女」として受け入れられ、お客様ではない立場になったことで結婚などの人生儀礼に登場する刺繍布の役割や家族関係に関する調査を進めていく。

第三章では、著者は女性の手仕事だけでなく男性の手仕事へと調査を広げていく。牧畜生活の必需品である放牧用の紐やラクダの腹

帯、乳当て袋などの技術調査は、刺繍と同じようにその制作技術を学ぶなかで行われていく。ラバーリーの家族に受け入れられることで親戚づきあいが増えたこと、プライバシーがないことなどから生じる焦りやとまどい、男性の手仕事を調査することの限界なども感じていく。

第四章では、ヨルダンでのカワール・コレクションの染織資料データベースづくりが中心になる。染織資料の扱い、資料情報の作成、そして染織品や衣装のデータベース作成のプロセスが記されている。不定形な布の造形物である衣服をどのように測るのか、それはこれから服飾調査を行おうとする多くの人に意義のある経験談であろう。また、著者はこの経験からラバーリーの染織品との比較の視点を獲得していく。

第五章は、2001年に調査地インド西部を襲った大地震の様子を、著者の経験から描いている。震災復興の過程で外部から多くの労働者がやって来たことでラバーリーの人びとの生活は変化する。家屋や衣装までも変容したという。女性たちがタンクトップを着用し、家屋もコンクリート造りが増えていく。生活の変化はラバーリーの文様表現にも変化を与え、著者はその新しい文様の創造を、「新しいものへの感情が、イメージの形成において代理物として機能している」と捉える。つまり、文様は単なる模倣反復ではなく、継承しつつも大きな感情の起伏によって変化していき、著者はまさにその極意（著者が言うところの「肝」）を抽出したということだろう。

第六章では、映像取材のために調査地を訪れ、国立民族学博物館の「ビデオテーク」の制作プロセスが描かれていく。映像が完成して現地で観賞する段になり、商品用の刺繍制作をする光景を見た調査地の女性たちが、商品用は不出来であると口々に言ったというエ

ピソードが印象に残った。観光土産などを目的とする商品として十分であっても、粗く雑な縫い目は彼女たちにとって「良い」刺繍布ではないという。生活するための現金収入のために各地でNGOが女性たちに手仕事を奨励しているが、高い技術を持つラバーリーの女性たちが商品のためにその技術を落として粗悪な刺繍布を作る必要はない。「自分がよしとする刺繍がつかれないなら、日雇いの仕事と刺繍作業は同じこと」というラバーリーの女性の言葉は、ものづくりの喜びを知る人に常に共有されたものだろうと感じる。

ラバーリーの人びとの「売るためではない」ものづくりの制作技術を通して、その評価の軸が制作者とその家族、さらには地域のネットワークすべてに関わるものであることを、著者は理解していく。時間と手間は価格に反映されるとは限らない、生きていくための価値の軸へと辿りつく著者の旅は、なんと刺激的でスリリングだろう！

世界の民俗文化や手仕事に関心を持ち、これから文化人類学的なフィールド実践を学ぼうとする若い人たちに是非手に取ってもらいたい。フィールド調査には多くの喜びとともに、様々な苦悩もあるだろう。そこで共に手仕事をする時間を通して得たもの、また技術を学ぶことにより相手を敬い、深く、深く、感じ取ってきた「肝」を、惜しげもなく読み手に教えてくれる良書である。きっと、読みながら、著者とともにワクワクするような旅に出てしまうこと必至である。

#### 註

- 1 松宮秀治『ミュージアムの思想』白水社、2003年